

Hit And Run!!

ドクターペッパー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世を憂いて自殺をした犬塚雪無はその魂を神に魅入られ転生することとなった。

その舞台「I S—インフィニット・ストラトス」

果たして彼はそこで何を手にするのか？

# 目次

第捌話	44
第質話	38
第陸話	34
第伍話	30
第肆話	24
第參話	18
第貳話	11
第壹話	5
Prologue	1



## P r o l o g u e

ああ、何で俺は生きているんだろう：

お金は十分、友達は居る、でも何かが違う

思春期特有の物だと言われたらソレまでかも知れないけれど

漠然としたなんとも言えない：まるで水の中に泥を入れたみたいな

違和感が体に纏わりついて離れない：

一体何時からこんなに暗くなってしまったのか？

昔はもう少し明るい子供だったはずだ

気がついたらビルの屋上に居た

なんだかまるでこのセカイが俺に早く死んでくれと言っている様な気がした

「なら、いつそ死んじゃうか…」

それが、俺犬塚雪無の最期の言葉になった

——何故生きてる？

俺は自殺をした筈…失敗したのか？

「いんやあ君はちゃんと成功した。だからここに居る」

突然の声に戸惑いつつも声の方を見ると…

「胡散臭そうなオツサン。そう言いたいんだろ？犬塚クン？」

言おうとしたことを先に言われた。

何者何だろうか？

神とかぶつ飛んだ解答が来ないことを祈りつつ答えを待つ…と

「おお、よくわかったね。そう、俺はお前らが神様と言っている存在だ」

カミサマね…そんな偉い偉い御方が何で俺なんかに？

「何、別に誰でも良かった。偶々お前が死ぬのが目に留まった。俺は魂を必要としていた。丁度いいお前にしよう。それだけだ」

成る程、別に俺がトクベツだった何て事は無かったか…

「そう言うな、俺の目に留まった。それが既にトクベツだ。なにせ俺はカミサマなんだからな」

そう言つてカミサマはニヤアと笑つた

「さて、俺が魂を必要としている理由だが：簡単に言っちゃまえば俺らにはノルマがあつてよ、そのクリアの為に新しく世界を作らにやいかんのだが：普通じやつまんねえ。ならどうする？」

俺をその世界に混ぜるのか？

「そうだ、お前つつー異物をブチ込んで世界の変化を愉しむ。だからお前は俺にその世界での望みを言え」

望み…

「あ、そうそう、その世界は女尊男卑、ISつつー兵器が存在する世界だ。自衛の手段は必要だぞ？例えば…」

この扉の向こうは俺の今まで居たのとは違う世界だ

そう思うとなんだかワクワクしてきて———そういえばワクワクする何て感情は何時以来だろうか…

あのカミサマのお陰なのかもしれないな…

「どうした？今更怖気づいたか？」

「…いや、そんなことはない。じゃあなカミサマ」

扉の向こうは真っ白で段々意識が薄れて――

「行ったか……さて、アイツはどんな風にあの世界を引つ掻き回してくれるのかな？」  
この何もない空間に一人だけになったカミサマは胡散臭い笑みを称えてそう呟いた



## 第壹話

転生してから13年経った

このセカイに来てからずっとやってきたトレーニングのお陰か170cmまで身長は伸びていてなんだか嬉しい

でも疑問がある

あの時カミサマはISという兵器があつて、女尊男卑な風潮、そんなセカイだと言つていた

なのに女尊男卑なんて欠片もないしISなんて物もない、平和そのものだ

あ、そうそうISと言えば束さんがISという単語に異様な反応をしてたっけ…

んで、その束さんに呼ばれて何やら怪しげな場所に来たわけだが…

「ついたよなっくん！」

目の前にはよくわからないパーツがたくさん転がってる中に1つだけ、大事そうに

置かれる球体があつた。

「ああっ！ソレに触っちゃ…」

「へっ？」

触る直前までは小さいガラス球だったモノが触った途端に輝きだした

Access

System Start

機械音声が頭に響いた

けど特に何も起こらない…

「あちゃーやっちゃったかー」

「何をです？東さん」

「そのなつくくんが持つてるのはISのコアなんだよ。それでね、男の人には反応しないはずなんだけど…おかしいな…この天災東さんに理解できないことなんて無いのに…あれ？何で？ロックが掛かって中を見れない…」

「取り敢えず、このISコア？はどうすればいいんですか？」

「ああ、いいよあげる。何故か初期化出来ないし…」

そんなこんなでISのコアを貰った。

「ホラ、コアだけじゃソレは余り意味が無いからね…ココのものは自由に使って良いからね」

ふと、懐かしい記憶が頭を過ぎった

もう三年も前の出来事なのに…

あの後、結局二年掛けて今ポケットに入っているＩＳが完成した  
何でこんな話しを頭の中で言っているかって？

そりゃあ…

この周りからの視線から逃れる為ですよ…

「ええと皆さんそれでは一年間よろしくお願いしますね」

壇上で副担任の山田先生が話すも皆、俺とその親友織斑一夏へ集中していて誰一人として返事をしない…

あ、先生泣きそう

「じゃ、じゃあ自己紹介から始めましょう最初は…相川さん」

と、順調に進み俺の番が来た

「じゃあ、次は犬塚君」

「犬塚雪無、見ての通り男です。趣味はISを弄ることと寝ることです。そんな訳でお休みなさい…」

と、寝ようとするのと上から出席簿が降ってくるので避ける、避ける、避ける

「まだまだですよお〜織斑センセ?」

「クッ」

あ、今モンスターペアレントもびつくりのことをやったのは我が一組の担任だ

ついでに言えば一夏の姉でもある

「取り敢えず寝るのは休み時間にしろいいな?」

「ええ〜」

「いいな?…って寝るんじゃない!!オイ鏡、お前、コイツが寝ないように見はつとけいな?」

「は、はい!」

そして一夏の番がやってきた

山田先生の呼びかけに中々応じなかった挙句、内容が悲しすぎて周りが皆ずっこけて

た：ほう、鏡さんのパンツはピンクの縞パンと：

おい、Jarvis今の写真撮つといただろうな？

(勿論ですマスター)

よっし!!よくやったJarvis、コレで暫くオカズには困らなさそうだへっへっへ

：

(顔に出ますよマスター)

そして一時間目のISの基礎についての話も終わり、今は休み時間である

「おっくい!!雪無。お前もIS動かしたんだって?」

「ああ、お前みたいに試験会場を間違えたりはしなかったけどな」

「グツ：痛いところを突きやがるぜコンチクショウ：」

「おい、ちよつといいか?」

「あ?」

振り向くと一夏の無限インフイニティ・フラグ・マスターの建設被害者第一号が居た

「一夏を借りるぞ」

俺が何か言う前に一夏を引っ張ってどっかに連れて行きやがった…あのモツプめ  
この女子たちの地獄に俺が耐えられるとでも？股間のアレが爆発しちゃうぞ？

(無理して変態キャラ演じないでくださいマスター)

寂しいJarvisのツツコミが脳内に響いた

## 第貳話

休み時間も終わり、今は山田先生が壇上でスラスラと教科書を読み上げている

そして親友であり、前の席に座っているもう一人の男性操縦者織斑一夏と言えは…

絶賛混乱中であつた

なんでアイツあんなに隣を見たり、教科書をめくっては戻しを繰り返してるんだ…？  
どうやら先生も疑問に思つたらしく一夏に態々

「織斑君、何かわからないことがありますか？」

何て聞いている

一夏は…教科書を一頻り睨めっこした後

「ほとんど全部わかりません」

自慢げにこう言いやがつた…バカなのか…？

ほら、やまちゃんのカヤパシテイをオーバーしちやつたのか固まつてるし…

錆びたブリキ人形のようにギギギと顔をあげたやまちゃんが皆に息も絶え絶えこう

言つた

「え、ええと…織斑君以外で…今の段階でわからないって人、いますか？」

誰も手を挙げない、当たり前だ

あ、やまちゃんがかっこいい見た、何だろ？

「ええと、犬塚君は大丈夫ですか？」

なんだそういう事か

一夏のバカが出来ないから同じ男の俺はどうなんだ…って訳ね

「いえ、大丈夫です。俺はアイツみたいにバカじゃありません」

「言ってくれるじゃねえか雪無ア…」

「事実そうだろ？ 大方古い電話帳とでも間違えて捨てたんだろ？」

おいおいマジかよ…予想が当たったようで、一夏はぐぬぬと言った顔をしている…

野郎がやつても可愛くねえよ…

スパアン!!という綺麗な音と共に、一夏が倒れた…生きてるよな？

「あの馬鹿者が…山田先生、授業の続きを」

「は、はい…ええと…なので、ISの運用にあたり…」

さて、二時間目も終わり、結局あの馬鹿は織斑センセイから一週間で捨ててしまった  
教本の内容を覚えよと言う無茶な命令を受けていた

ザマーミロ



さて、次の時間の準備をしなくては…

「ちよつとよろしくて？」

? 誰だ

振り向くと其処には私は女尊男卑の申し子ですと言わんばかりの雰囲気を醸し出した白人が居た…誰? アイツ…Jarvis

(セシリア・オルコット、イギリスの代表候補生です。マスター)

ん、ISは?

(ブルーティアーズ、第三世代機の実験機です。マスター、脅威すべき点は、名前の由来、射撃型特殊レーザービット4機+弾道型ミサイル2機です。マスター)

たかがビットに警戒? どういう事だ?

(理論上、彼女のレーザーはBT偏向制御射撃が可能なようです…しかし、どうやら最大稼働率を満たしていないようなのでマスターの脅威には未だならないでしょう。しかし、警戒はしてください。マスター)

了解

「ちよつと聞いておきますの?」

どうやら暫くJarvisと会話して彼女をおざなりにしたのが気に入らなかったようで

私、怒ってますオーラを出していた

「あ、ああ悪い悪い君の日本語が少しおかしかったものでね…理解に時間がかかった」  
 こういう相手は弄るに限る…

「ええっ？本当ですか？」

「……ああ。おかしい。まあ、理解できないほどではないし、気にすることは——」  
 予鈴が鳴ってしまった

どうやら彼女も織斑先生の出席簿アタックは怖いらしく、席に戻ってしまった

「ひ、昼休み、覚えていてくださいまし!!!」

三下の吐くような捨て台詞を残して…

「では、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

どうやらこの時間は織斑先生が授業をするようだ…

因みに、俺のISには、拡張領域バズスロットはたくさん有るけど、後付装備イコライザーを取り付けると本

来の装備の邪魔をしてしまうので基本的に付けることは出来ない…いや、しない

と、どうやら織斑先生が何か思い出すように、

「ああ、そうだと再来週のクラス対抗戦に出場する代表者を決めなければな…」

ふうん…なんだか楽しそうだ…

だけど、次の言葉でその気持ちは砕かれた

「クラス代表とはそのままの意味だ。生徒会の開く会合に出席したり…要是クラス長だな」

絶対になりたくねえな…まあ、一夏あたりが推薦されるだろ

「はい、私は織斑君がいいと思います!!」

「はい、私も!!」

……

「他には居ないな? 自薦他薦は構わないぞ?」

「チクショー嘘だろ?…あ、じゃあ、俺は犬塚クンを推薦しまーす!」

「何っ!!」

あんにやろう…まさかこういう手段に出るとは…

「納得いきませんわ!!」

机が壊れるんじゃないかというほどの音を立て、オルコットが立ち上がった

「その様な選出は認められませんわ!!」

おお、良い事言う…そのまま俺がクラス代表に選出されないように…

「大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ!! 私に、このセシリア・オルコットにその様な恥を一年間味わえと仰るのですか?」

オイ、Jarvis、今のは

(勿論録音してます。マスター)

ならいい

「実力から言えばこの私がクラス代表になるのは当然。それを、物珍しいという理由で極東の猿にされては困ります！私は——」

要約すると、男の癖に、日本人の癖に、クラス代表なんて任せられるか!! って事のよ  
うだ

あ、一夏がプルプルしてる…そろそろ爆発するかな？

「英国だつて大してお国自慢無いだろ？クツソまずい飯で何年覇者ですかあ〜？」

ものすごく小馬鹿にした言い方だこりやあオルコット、激怒するぞ…

「あ、あなた私の祖国を侮辱しますの？」

あくあ、一夏の野郎がまた面倒なことをやらかした…

「決闘ですわ!!」

「だつてさ、一夏。がんばれ〜」

「貴方もです!!!」

何だと…？

「マジっすか…じゃあ、ハンデはどんくらいで？」

「あら？早速お願いかしら？」

「いやあ…俺がどの位つけければいいかって事。あ、別にアンタを侮辱してるわけじゃないよ。」

周りにからクスクスと笑い声が聞こえる

「犬塚君ソレ本気？」

「男が強かったのってだいぶ昔だよ？」

「ダイジョーブダイジョーブ…んじや、ハンデは無しでいいんだね？知らんぞ俺」

「ええ、ええ、いりませんわ。それより、もし貴方が負けたら…私の奴隷になりなさい？」  
「断る」

え？…なんで、イギリスじや、負けた人は勝者の奴隷になりましょう、なんてステキなきまりがあんの？

「…貴方という人はあ…！」

どうやら声に出してみたい…

「よし、では勝負は一週間後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、犬塚は準備をしておくように、

それでは、授業を始める」

## 第参話

先ほど授業は終わったが俺はまだ教室にいる

理由は簡単、オルコットだ

あんなことを言ってしまった手前絶対に勝たないとなあ…

どうしようかな…

「おーいー！」

「なんだ？一夏」

一体コイツはどうするつもりなんだろうか

訓練とかすんのかね？一週間でどうにかなるとは思えないけど…

「雪無、頼む。ISの戦い方、教えてくれ！」

ええ、俺に頼るのかい…あ、篠ノ之さんがすげー見てる…

「一夏、ほら、箒さんとかに頼んだらどう？」

あ、よくやったみたいなの顔してる

俺は別に君のためにやった訳じゃないんだけどな…

めんどいからね訓練に付き合うとか

そんなんやるくらいなら整備するね

「そうだな。箒に頼んでみるよ」

「おお、そうしろ。面倒臭いからな」

「ははっお前らしいな」

そりやどうも

「ああ、織斑くん。犬塚君。まだ教室に居たんですね。よかったです」

何だろうか、やまちゃんが大量の書類を抱えながらこつちに来ていた

「二人の寮の部屋が決まりました」

と、部屋番号の書かれたカギを受け取る…

1026番ね

「おい、一夏。お前それ…」

「あ? どうした…」

「番号が1025つてい見えるんだけど、コレは俺の目が腐ってるからなのか?」

「何いつてんだ——」

そこでようやく一夏も気がついたらしい

「部屋の番号が違う…?」

「あれ? 山田先生。部屋を2つも確保出来たんですか? 確か部屋割りの関係で一週間ほ

ど自宅から通えと言われてたんですけど…」

「ええ、ですが事情が事情なので一時的な処理として無理やり部屋割りを変更したそうです…ふたりともその辺政府から聞いてます?」

「少なくとも俺は…」

と言いながら首を横に振る

一夏は?

「俺も聞いてませんね」

「そう言う訳で一ヶ月ほどは相部屋になるみたいですね」

オイ…: どういう事だ

一人部屋じゃないのか?

「あの? ってことは女子と同室ってことですよ? 大丈夫なんですか? いろいろと」

一夏は何故か何の疑問も持っていないようなので代わりに俺が聞く

「ええ、その様です…: はあ」

どうやら色々あつたらしい事をやまちゃん表情が物語っていた

「それで、荷物は一回帰らないと準備できないので一回帰ってもいいですか?」

「私が手配してやった。ありがたく思え」

一夏は先生が準備してくれたみたいだ



…俺はまあいいか。どうせISの拡張領域に最低限のモノはしまってるし

この後、やまちゃんが事務的な話をして解散となった

「おい、雪無。一緒に寮まで行くこうぜ？」

「わり、俺。パス」

「何で？」

「整備室覗いてから行く」

ちよつと設定弄つとかねえとな

「あ、じゃあ俺も行く」

「見ても面白く無いと思うぞ？」

つー訳で二人一緒に整備室まで来たんだけど…案の定一夏はつまらなそうにそこらに落ちていた機材で遊んでいる

「つままないだろ？先に部屋に行ってたら？」

「いや、いる」

「あつそ」

(set up sequence…)

と、俺のISの設定画面を投影する

「さて、ココからは本格的に暇になるぞ？暫くこっちに没頭するからな」  
「分かった…んじや、先行くわ」

さて、面倒臭い設定も終了と…げ、消灯時間まで後十分しかねえ  
誰か言ってくれよ全く…こりや夕食抜きだな

さて、途中で先生に会うこともなく何とか部屋の前までたどり着いた  
「失礼しまーす…」

返事がない…

まあ着替えに遭遇なんてことは無いだろ、一夏じやあるまい

「…おおう」

着替えに遭遇はしなかった、でもベッドの上、裸エプロンで仁王立ちしてこっちを見てくる変人に遭遇した

## 第肆話

「わたしにしますか？わたしにしますか？それともわ・た・し？」

あるえ？部屋間違えたかな？

取り敢えず一旦部屋から出よう

ガチャ・・・

あ、駄目だ、さつきと変わらないポーズ執ってる

「ええと・・・まさかとは思いますが、貴女がルームメイトってことですか？」

その服のどこから取り出したのか扇子を広げて・・・

『そうよお〜』

バカにしてんのか？

「あらあら、そんなに怖い顔しない」

イライラする喋り方だなあ・・・寝るか

「ベッドは窓側使うから〜おやすみ」

「ああちよつと！」

昨晚の最悪な気分も寝たお陰でさっぱりだ――

「昨日は激しかったわね？」

―― やっぱり最悪かも

「はいはい激しかったデスヨー」

さっさと食堂にいこう、こんな変人に付き合う必要はない

「ああん待ってよ。つれないわねえ」

無視無視

「おう、おはよう」

扉を開けて早々に一夏の挨拶か…… どうせなら女子にされたかった

え？あの青髪？あれは痴女だからノーカン

「おう、おはよーさん．．． 昨日どうだった？」

「どうだったって？」

「女子と相部屋だろ？なんか無かったの？」

まさか俺のところみたいに変人はいなかっただろうけど．．．

「ああ．．． 木刀で殴られそうになったな」

「それは中々．．．」

「お前は？」

「俺？何か痴女に懐かれた」

「なんだそりゃつと食堂ださつさとメシ食おーぜ」

「ココのご飯結構美味しいな」

「昨日の夜も食つとけば良かったのにな」

「いいんです」

うん、中々の味だった

税金様様だね

「ほれ、さつさと教室行くぞ」

「お前食うの早すぎんだろ」

キーンコーンコーン

俺あの音嫌いなんだよね、授業開始みたいな感じがして

まあ、実際そうなんだけどさ

つと織斑先生にひっぱたかれる前に話し聞きますか

学園に予備の機体が無いから一夏には専用機が渡されますよってのが先生の話だった……俺は？

「お前は専用機を既に持っているのだろうか？ならば必要ない」  
膠も無い

まあ、一夏本人は専用機って何ですか状態だけど

お、オルコットが態々説明しに行った

「ねえねえ、犬塚君も専用機持つてるの？」

「持つてるよ」

「ふうん…」

それつきり何も言わなくなっちゃったけど… なにかまずい事言った？

「本来なら国家や組織に属すものに渡されるものなのだが… お前の場合はデータ収集の為といった所だな」

「先生質問！」

俺に質問した子が勢い良く手を挙げる

「なんだ？」

「犬塚君のISはどこから支給されたものなんですか？」

「恐らく篠ノ之束から直接貰ったのだろう」

そんなこと別に言わなくてもいいでしょ？先生

どうやら伝わったのか咳払いしてこの話は終わった



授業も滞り無く進み、今は放課後、整備室に籠り昨日の整備の続きを始める  
と、言っても昨日で大方済ましてしまったので後はスラスターの調整位だろう  
あ、後俺のISのみに存在するモノの調整か…

## 第伍話

ISの調整も無事昨日終わり、今日は遂にクラス代表決定戦だ

本当なら俺は控え室に居るべきなのに、一夏のISが未だ届かないとかで今俺はピットの中にいる

「さあ、Jarvis。ATD- $\beta$ 起動だ」  
アイアンマン

(起動準備完了しました。マスター)

ポケットから待機状態のソレを前に突き出し、

「展開」

その一言で腕部、次いで脚部、そして胸部、頭部の装甲が光とともに展開され、後頭部から顔へ金色のマスクが降りてくると同時に全身の装甲が微調整されていく

「FCSとFCRを繋げろ」

(完了)

「INSはどうだ」

(マスター、システム、スラスター他診断終了。異常はありません)

「うっし、じゃあ行きますか」

脚部メインスラスターを吹き、ピットからアリーナへ飛び出した

『両者、所定の位置に着いてください』

「あら、逃げずに来ましたわね」

蔑むような視線で見下げている。試合はもう開始しているのに余裕というやつだろ  
うな

(Jarvisあの銃を検索しろ)

——検索、六十七口径特殊レーザーライフル、スター・ライトmkⅢと一致——

「最後のチャンスを上げますわ」

「チャンスだあ？」

「私が一方的に勝つのは自明の理。ですから、ここで負けを認め、

謝るとおっしゃるのなら許してあげないこともなくつてよ？」

「銃口を向けながら吐くセリフとは思えないね」

「そうですか……残念ですわね。なら——」

——警告！ロックオンされています——

「お別れですわね！」

蒼い閃光が俺を貫かんと迫って来る。普通のISなら回避は難しいだろう。普通の

IS、なら

左のメインスラスターを作動。2時の方向へ0から亜音速まで急加速、アリーナのバリアギリギリで右腕のバーニアスラスターを吹き転換——そしてオルコットの真後ろを取り、両掌から青白い光線を吐き出す

「どう、散々馬鹿にしていた男からの一撃は？」

「嘗めないでくださいまし——さあ、踊りなさい

私、セシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる円舞曲で！」

「どうせならベッドの上で踊りたいねっ！」

4つのブルー・テイアーズが遂に動き出した

「第三世代の兵器。イメージインターフェイス…ね。がっかりさせないでよ？」

不規則な動きを見せ、ビームを撃ってくる…が

「当たらないんだなあ？それが」

スラスターを吹いて加速。フラップを開いて急停止。それに加えて掌のバーニアスラスターによる左右の移動。

ビットはもう全て叩き落した。

オルコットは完全に錯乱していた。

「ほら、止めだ」

頭を掴み直にリパルサーレイをぶつけようとして――

「掛かりましたわね」

「何？」

「ブルーティアーズは4機だけじゃ無くってよ」

腰の砲身がこちらを向く。

「墜ちなさい！」

「喰らうかよっ」

衝撃波を撒き散らしながら真上に飛びフレアをバラ撒く。

が、依然引っ付いて来る。

「糞っ！もうちよい広けりやあ」

「あら？負け惜しみはみつともなくってよ？」

仕方ない。ここは一発もらつとくか

直後閃光と黒煙が観客の目に飛び込んだ

## 第陸話

うゝん…まさかあんな隠し球があつたなんてな

残りエネルギーはつとJarvis

——残りエネルギー170/190——

やっぱり第一世代機ベースってのはきつかつたかな？

ま、そんなことより…決着つけますか

まずはこの黒煙地獄から抜け出しますか。

「あら、貴方のことですからてつきり黒煙の中からミサイルでも撃つてくるかと」

「ああ、ソレもいいね。でもさ、そんなことよりも——」  
独特な音のあと爆発音が響いた。

「この方が楽しいでしょ？…聞こえてないだろうけど」

地面に刺さってるな…少しやり過ぎたかもしれない。

『勝者、犬塚雪無』

アリーナに俺の名前が響いた。

ピットに戻ったところで、オルコットのISが軽い整備では足りなくらい破壊されたとかで一夏VSオルコットは無くなった。

次からは出力を抑えたほうがいいかもしれない

(Jarvis機体の損傷具合を確かめる)

(自己診断中…)

カタカタと全身の装甲が蠢き、もとの位置へと収まる。

(左腕に軽度の損傷が認められます。どうしますか?)

「次の試合が終わった後で換装するさ。すぐに終わる」

そろそろアリーナに出ますか

「よう、一夏」

「へえ、犬塚のISってフルスキンなんだな」

「そりゃ、ベースが第一世代ですからねえ…お前のは第二代じゃないか？」

「何だかわからないけどなら俺でも勝てそうだ」

「あんまし舐めんなよ」

胸部装甲から極太のレーザービーム——ユニ・ビームをぶつ放す。

「甘い！」

あろうことか一夏は近距離ブレードでビームを薙ぎ払った。そして消滅。

「何をした？」

「雪片弐型」

「ふうん…ならコレはどうか？」

右腕を一夏に向け…腕から対戦車ミサイルを飛ばす。どうやらコレは消滅しないよ

うだ。

やっぱり、あのブレード——雪片弐型はエネルギー兵器しか消せないようだ。

「どうした？質量兵器は苦手かい？」

「うるっせえ」

そんなスピードで突っ込んできたって簡単に避けられ——

加速した？

「チイツお前ほんとに乗りたてかよ」

「そうだけど？どうしたってんだ」



「イグニッションブースト使う初心者なんて普通いねーよ」

これは遠距離で戦ったほうが良さそうだ。

地面スレスレまで下降——そして急上昇！よし、一夏は地面に埋まったな…

「んじや、その無様なケツにプチ込んでやるかア」

対IS用のパイルバンカー（屑）をコール

一発

二発

三発

とここで試合終了のブザーが鳴り響いた。

取り敢えず一夏は引っこ抜く

「畜生め…」

「悔しかったら勝ってみろ。立てるか？」

「いや、最後の衝撃で腰抜けちまって…」

「しやあない。連れてってやるよ」

生身で50mの高さを飛ぶのは怖かったのか一夏の叫び声が面白かった。

「助けてえ〜ち〜ふ〜ゆ〜ね〜え〜」

## 第質話

和名：鋼の男

型式：A T D— $\beta$

世代：第一世代

国家：アメリカ

分類：絶対的多用途戦闘型

装備：レーザー誘導粒子線『リパルサーレイ』

対地ミサイル『ジェリコ』

装甲：ゴールドチタン合金による全身装甲

仕様：アフターバーナーを使用しない超音速巡航

今時珍しい第一世代機がベースとなっているが、FOX—INDUSTRYの技術の粋を結集し、篠ノ之束作の特別なコアにより第五世代相当のIS

全身を赤と金の装甲が覆ったまさに鋼な特別機。

「実際のスペックを聞いたはずだよな？」

粗暴そうな女が問う。

「ええ。そこまでしかわからなかったわ。但し、」

差し出しされた紙束を引つ手繰る粗暴な女

「おいおい……冗談だろ？ なんだよこれ……」

「冗談ならどんなによかったかしらね？ オータム」

「ハッ！ どうせカタログスペースの水増だろ？ 大したことねーよスコール」

投げ捨てた紙束には理論上マッハ10での飛行、及び戦闘が可能と書いてあった。何処かの高級ホテルの様な内装の部屋から、平和は恐怖に侵食され始めた。

「なあ、雪無。クラス代表つて誰になったんだ？」

「俺。オルコットはお前と戦う前に辞退した」

「へへ」

また数分後

「なあ、雪無のISつてどこ所属なんだ？」

「アメリカ。さつきからどうした？」

「いやあ、セシリアの奴が言つてたろ。イギリスの代表候補がゝつて」  
成る程。それで俺に聞いてきたわけか

「ISが世に出回つた頃から俺、居なくなつてたろ？その時東さんにアメリカに連れてかれてさ、FOX—INDUSTRYつて会社の社長にさせられた」

「ええ？FOX—INDUSTRYつて唯一ISのコアの解析に成功して売り出してる  
ところだよな？」

周りで聞き耳を立てていた女子たちが騒ぎ始める

「なあ？コアつてどんなものなんだ？」

「いいですか？一夏さん。篠ノ之博士が創つたコアは467個。これらは基本的に全て  
専用機に使用されています。ここまではわかりますね？」

いつの間にやら現れたオルコットに圧倒され、コクコクと頷く一夏

「ですが、量産機——打鉄等を合わせると467機を超えてしまいます。ISに絶対必  
要なコアが467個しか無いのにです。世界中がコアの解析をしました。しかし、コア  
は結局解析できませんでした」

一呼吸置いて

「しかし！FOX—INDUSTRYが遂にコアの解析及び量産に成功。なので全ての

量産機にははFOX—INDUSTRY製のコアが使われていると言っても過言では  
ありませんわ」

「…なら、専用機つてのはなんのためにあるんだ？」

ようやく頭の追いついてきた一夏が周りの女子も思ったであろうことを代弁する。

「いい質問ですわねえ！コアの解析に成功したとはいえ、本家篠ノ之博士のコアには遠  
く及びません。なので、量産機は専用機には勝てないのですわ」

「…中々の説明だ。オルコット。本来ならHRの時間だが。まあいいだろう山田先生。  
HRを」

「はー」

授業はつつがなく終わり、今は休み時間。

相変わらずココの学食は美味い。そして――

「さあお昼を食べましょ？」

あのうざい青髪女もいる。

そそくさと逃げ始める一夏達。友を見捨てるのか…一夏よ

「うるせー美人に詰め寄ってもらえるなんて羨ましい！」

お前人のこと言えねくだろつと何かまた絡まれている。ザマーミロだ

午後の授業は寝てたんで正直わかりませんです。

まあJarvisに録音、録画頼んどいたからいいんです。

「なあ、一夏。どうしてもダメか？」

「ダメだな」

俺の縫る様な声をバツサリと切り捨てるこの学校で唯一の男友達。

「さいですか…」

気がついたらひとつしか無いベッドの上で話す内容は次のクラス対抗戦について。

二組のクラス代表が中国の代表候補生になったとかでそいつと戦う事になったけど

一夏の馬鹿ヤロウがその娘を怒らせたらしくとても面倒くさい。

何故か原因である一夏が謝らないのでその娘の怒りの炎に油を注いでいるそう（俺のルームメイト談）

「畜生め戦うのは俺なんだぞ?」

「いいじゃねえか第三世代だっけ? セシリアと同じだろ?」

この野郎他人ごとのように…

お前の女関係が原因で奴さんがパワーアップしてるんだっつーのに…

「はあ…もういいや。どうせ勝たなきゃ学食のデザート半年券が手に入らないんだから」

「へえ〜お前甘いもの好きなんだな」

何だその顔は

「ところでお前いいの?」

「何が?」

おもいつきり間を開けてから

「篠ノ之とかオルコツトとかと訓練するんでしょ?」

直後、一夏の顔がゾンビみたいになった。

## 第捌話

一夏を絶望のどん底に叩き込んだと思つたら自分もその其処でぶっ倒れていた…

何を言ってる——

「ハッ！どうせ死ぬなら道連れだ」

「謀つたな一夏め…」

どういふ状況かといえればオルコットと篠ノ之の一夏LOVE同盟VS男組で戦つて男組が負けた。ただそれだけだ。

「しかし、雪無といえど2対2は弱いんだな」

「おい、一夏」

「…なんだよ？」

取り敢えず言いたいことがあるのでこちらを向かせる。

「言い訳するつもりじゃないがお前があんな事言わなければ勝つてたからな？」

「それは言い訳では…？」

篠ノ之の声が聞こえた気がしたけど無視無視



遡ること30分前

「あらあら？レディを待たせるだ何て一夏さんは——」

「何をしていた？一夏」

オルコットに被せる形で篠ノ之が問いかける…鬼つてああいうの言うんだろな

「…いやあ？俺は行こうとしたよ？でも」

「何だ？」

篠ノ之の氷のような目…まあ恋する乙女つて素敵ですね。一体何人殺ってきたんで

しょう？

「雪無に捕まって遅れましたっ！」

あの野郎…引つ張るから何かと思えば…こういうことか

「そうか…では調度良い。2対2で戦おうではないか」

「はい」

情けない声を出したのは決して有無を言わせぬ顔が怖かった訳じゃ無い。

……ここまでなら正直勝つ自信があつた。いや、絶対に勝つた。

問題は――

「なあ、雪無は訓練機で戦ったらどうだ？」

――この一言にあつた。

「おい一夏！其処に居たら撃たれるぞ！敵は篠ノ之だけじゃないんだ！」

篠ノ之に一直線に飛んでいき、見事ブルーティアーズに撃ち抜かれる一夏。

「だーっ！射線に立つな馬鹿！撃たれたいのか!？」

俺が何とか作つた篠ノ之の隙を馬鹿の一つ覚えで突っ込んでいき台無しにし、

「うわあ！あぶねッ！」

その篠ノ之にカウンターを喰らい加速しようとした俺にぶつかつて来る。

いつもよりも操作のラグの大きな、加速の遅い俺の苦手な機体なのに、アイツのお陰で開始10分足らずでシールドエネルギーは

未だ飛んでいるのが不思議なくらいだった。

さて、過去をいつまでも眺めたって仕方がない。

次は――

「私も混ぜてえ？」

「この妙な猫撫で声は…」

「なあ、俺帰っていい？」

「ハア？」

「あらあら？そんなこと言ってお姉さん悲しいなあ〜」

「うるせえやい」

ルームメイトで学園最強（自称）の――

「あら？そういうえば名乗ってなかったわね？」

「更識楯無。ヨロシクね」

「なっ」

胡散臭い青髪野郎だった。

「き、貴様何している！」

わあ、怖い。篠ノ之つて独占欲どんだけ強いんだろうね？

「なになんて？抱きついてるだけじゃない。一夏く・ん・につ」

あんなんで顔真っ赤にしちゃって…

「あら？嫉妬？」

「ちげーよ馬鹿」

「いいいいい一夏さん？一体何を為さっているのかしら？」

お、さつきまでぶっ倒れてたオルコットが復活した。

オルコットさあくん、スターライトMKⅡが一夏に向いてるよ？

え？ワザと？さいですか…

「さて、じゃあそろそろ訓練開始といきますか。訓練機も借りれる時間に限度があるし」

そんなわけで生徒会長を加えて5人での訓練が始まった。

「なあ、俺もう打鉄やめていいよね？」

「ダメだろ」

「ええく？」

「オラァー！」

打鉄も意外といい気がしてきた。

シールドエネルギーの残量を考えなくてもいいってのは戦略の幅が広がる。

「ほらあ墜ちなさい」

更識の水をまとったランスが俺を貫かんと迫る。だ、け、ど

「そう簡単に喰らうかよっ」

いくら打鉄の加速が遅いと言っても瞬時加速を使えば話は別だ。

「いいねえ、シールドエネルギーが沢山あるつてのは。残量を気にせず吹かしまくれる」

「馬鹿にしない…でっ！」

流星は学園最強。こんくらいじゃ剥がれない。

「でも相手が悪かったね！」

これでも俺はISのコアの解析ができる存在だ。だからなんだって話かもしれないけど、特製についてはよく理解してるつもりだ。

右足を軸にスラストを吹かし、回し蹴りを決める。

「きゃあー！」

相手のシールドは0。俺の勝ちだ。

「立てる？」

「案外激しいのね？」

「そんだけ軽口叩けりや元気か」

アリーナに更識を置いてピットに戻る。

「なんだよ？その顔は」

戻るなり一夏の顔がアップで映る。ハイパーセンサーめ

「なあ、量産機では専用機に勝てないんだよな？」

「ああ」

「何でお前は勝てたの？」

ああ、そんなこと

「お前の姉が生身でISと闘えるのと同じだ」

あれを見たときは目を疑ったね。あの人は常にISを展開してるんじゃないの？  
生体ISとかいつてさ…

笑えないな。うん